

中村和郎先生と寺阪昭信先生を偲んで —2023年春グレコ会談話録—

この記録は、2023年3月27日(月)9:30~13:00に東京都立大学国際交流会館小会議室(Zoomによるハイブリッド開催)で開催したグレコ会の談話をICレコーダで録音したものを文字おこしたものである。出席者は、以下のように、対面11名、オンライン4名の合計15名であった。

<対面>志村 喬, 須田芳彦, 立岡裕士, 田中雅大, 堀 信行, 水野 勲, 谷貝 等, 矢部直人, 山根 拓, 山野正彦, 若林芳樹

<オンライン>安藤 清, 栗山絵里, 小林 茂, 寺阪桂子

今回は下記の3名から話題提供をいただいたが、小林氏の報告は別の機会に公表予定のため、本誌の記事では割愛した。

小林 茂(大阪大・名誉教授):近代移行期における近世的地理・地図概念の克服と明治政府:内務省地理局の解体と大蔵省主税局の地押調査

堀 信行(東京都立大・名誉教授):グレコ会前史再考—記憶の断片から紡ぎ出されるメッセージを探る—

志村 喬(上越教育大学):一学生が遠望・羨望したグレコ会—寺阪昭信先生を通して—

以下は、中村先生と寺阪先生の思い出についての談話を記録したものである。

【若林】

では堀先生よろしくお願ひします。

【堀】

今の小林さんのような理路整然と流れるように結論に至る。というお話から見ると全く逆行したお話で、申し訳ないんですけども、ご勘弁ください。

最初は、まず中村先生を思い出するために私のタイトルには中村先生という言葉は入っていないんですけども基本的に中村先生を追悼するという気持ちでお話したいと思ひます。

そういう点で中村先生の思い出を私の手元にあった写真で見てみたいなんですけど、これは一つは中村

先生の先生でもある矢澤大二先生がご退職されるときの写真。はい1977年ですね。退職のときの中村先生がご挨拶される光景になります。非常に緊張された状態ではありますが、今日のグレコ会の牽引者とにかく大事な人物は真ん中にある野間三郎先生です。この隣に中村先生がおられます。



写真1 矢沢先生退職記念祝賀会(1977年3月)

堀 信行氏提供

これが箱根ですね、いま大変こんな美しい。美しいと言いますとあえて言いたいのは、職員が一度に会して一緒に旅をする一泊二日で、そういうことを地理学科でやっていました。今そういうことを提案しても、何それという雰囲気は漂うような大学が多くなってしまっていて、大学の変更ぶりに私はあせんとするんです。

けれども私が就職した当時は、まだそういう雰囲気が残っておりまして、このように職員が一度に会してですね。多分箱根だったと思うんですけども、みんなで旅をして夜楽しく過ごすという会の光景です。何よりもグレコ会に至るプロセスは、この先生あつてのプロセスだったと私は思っております。

もう一つ私にとって大事な先生は、この戸谷先生であります。1986年3月に退職されたんですけども、その時の退職の会の光景で懐かしい人たちが並んでおりますが、画面の右端が中村先生でありますね。その隣の人が成田さんですが、いま伊豆大島で教員をして退職していると思ひますが、伊豆大島に行つて会えてないんですけども、どうしているかなといつも思っております。



写真2 戸谷先生退職祝賀会（1988年3月22日）

堀 信行氏提供

このように一人一人名前を挙げながら語っていたら、とても今日は終わりませんので、こういう私にとって欠かせない思い出の人たちということですね。これがその戸谷先生の退職の時にそのスタッフでこんなにいたんだなという。

同じ日に戸谷先生の退職の時に中村先生が挨拶されてるんですけど、この写真に映ってるのは中村先生の性格がですね、直立不動な非常に姿勢を崩さない気持ちですね。気持ちの中でいつもこういう雰囲気先生在生の中に漂ってるっていうのが、このまま姿勢に現れてる。心の中と姿勢がそのまま合ってるような、そういう印象をいつも持ちますけども、そのことが一つ、言いたかったんですね。

あとはこれ別々なんですけど、地誌研という戸谷先生を中心に中村先生と私とあと最初は野澤秀樹さん。それから小林茂さんが来られて、地誌学講座が存在していたわけですけども。

この名前が今は環境地理となって、今どうなってますかね。今は環境地理ですかね、講座といいますか、研究室としてはこの地誌学講座、研究室制度ができたので地誌研究室ということで地誌研というふうに呼んでおりました。

これもこの研究室制度のアイデアもですね多分に野間先生の教室改革のアイデアとしてあるんですね。センターという言い方も野間先生のアイデアだし。研究室ということを持ち出してきたのも野間先生なんですね。これが教室の中の在り方をがらりと変えていったわけです。

この地誌研究室ができて我々もゴソゴソいろいろやったんですが、実はグレコ会の発足にあたって、もし私が地誌研とグレコ会の中に存在した人間として、私の感覚で話させていただきますと、グレコ会

の成立に地誌研と私とのグレコ会との間に私がいるということがちょっと意味がありまして、このことは後でお話をするんですが、ちょっと軽く申しますと私が就職した1968年に地誌研の助手になりました。地誌学講座というものが初めてその時に誕生して、4月に誕生して戸谷先生が地誌研の教授になり、気候の研究室の方から中村先生が地誌の助教授になり、そして全く新しく野澤さんが人文の講座から地誌の助手になる。

今何を言いたいかというと、地誌の講座ができました。その時に地誌学講座の主催者である戸谷先生が方針を一言。私と中村先生と、野澤さんはフランスに留学してしまって、いるんですけども、実は私と戸谷先生と中村先生と3人しかいなかったんです。この3人でこれから地誌学講座、どうしますかと言った時に戸谷先生が一言。我々は全員自然地理学なんだ。なので地誌といっても自然地誌というキーワードでいくんだ、ということ宣告されたんですね。

自然地誌なんだからいわゆる地誌学なんだ。けれども自然地誌でいくぞとおっしゃって、中村先生もそうですねとおっしゃり、私は気持ちはわかるんですけども。そうですねという気持ちがあって、私と一緒に赴任したのが梶川勇作でありまして。もう一人が野上さんなんですね。野上さんは典型的に地形の方の講座にどっぷりであったんですけども。

私とまさに一緒に年も同じで人文講座の梶川君と非常に親しく飲み食いを一緒にしていたこともありまして、地誌の方針どうだろうかといったことも彼と話しているうちに、それってどうなのということになり、私は野上先生と梶川君を通してお話しする機会が1回2回からどんどん増えていって雑誌会という図書室で新しく新宿の雑誌をお互いに読み合うという会に私は即参加したいと言って、私だけが雑誌会に出席しました。

そうすると野間先生、梶川勇作、土井重彦、小林光子さん。その辺がいつも一緒に、読書室でやりとりしているときに、野間先生が地誌学講座というのが地誌学なのかということ私に問うわけですね。

どうも自然地誌でいきますと言ったら。うーんダメだろう。みたいな雰囲気が漂って何がどうダメなのかということになって、少し地理学とは何だよというのをちゃんとやらないんだと野間先生がおっしゃるわけです。そういうことがきっかけになりながら、私がどんどんどんどん野間先生のおっしゃることに傾斜していくわけですね。

それをうすうす戸谷先生や中村先生が感じている

んですけれども、私は私でももちろん戸谷先生と中村先生が自然地誌で頑張っていくぞとおっしゃること自体は、私自身もサンゴ礁をやりながら大事だと、何の違和感もなく。それはそれで大事だと思ながらも野間先生のおっしゃる地理学とは何ぞやということに対してきちんとした問い、きちんとした自分の中の方針をもちえてない状態で自然地誌とって自然地誌ができたところで、ダメだなと私ながらいつも思っていたわけです。

そういう気持ちがありまして、これで少しじゃあちゃんと勉強しましょうということになって、後ほどお話ししますけれども独酌会というのができるんですね。

それはちょっと後でお話ししますので、まずちょっと話を突然飛躍しますが、実は私が一旦都立大学からまた広島大学に行くことになりました。それが1978年なんですね。

それでもう私は広島大学にずっと骨を埋めるつもりで行ったんですが、本当に世の中わからないものでありまして、都立大学はその当時出戻りというのは好ましくないという雰囲気が漂っていました。あるいはそういうことは奨励されないことだと矢澤先生もおっしゃるし、戸谷先生ももちろんそうだとおっしゃるんですね。だからこういうふう一旦頑張るって外に出たらそのまま頑張るんだ、というふうにはっきりおっしゃっていました。

なので、私も再び都立大学に戻るということではないと思っていましたら、いろいろなことがおきました。まさかの展開で例えば私が出た後に新しく入った梶川君やそれぞれ野上さんなんかがどういう顛末になっていたかというのは皆さん今ご存知だと思うんですけども、助手からですね、そのまま上に都立大学の中にいて上に上がっていく、というのは好ましくないというふうにはっきりと言われていたんです。

けれどもそれではない形がちらちらと起き始めてしました。あれと思っていたんですけども。そうこうしているうちに、門村先生も北大に移られて。戸谷先生が退職された後に戻ってこられたときに、なんと地誌の流れであるところに戻ってこられて人文地理のほうに戻ってこられて、いろんな展開でこの細かい話が省きますけれども。

いわゆる今の環境地理のほうに地誌の流れの中にある講座の教授になられて、まさかの展開で再び都立大に戻るということが私の中で起きまして。自分でもですね、驚くとともに都立大の変貌に自分もそ

の変貌の中の一人になっていることに私の精神的緊張と矢澤先生、あるいは戸谷先生、あるいはその他の古い先生方がこれが都立大なのかと言っておられた精神をねじ曲げている人になっちゃうかもわからないという気持ちですね、そのときよぎりまして。そういうふうではない気持ちをどこかで維持しながら頑張るということをすごく意識して、その後少しずつやっているんです。

今でもそのときの心境というのはちょっと説明しがたい複雑なものがあります。

私が戻ったときにグレコ会の流れの中で私はグレコ会そのものが都立大の中できちんと今もこうやって続いているんですが、このグレコ会という名前を生み出した梶川勇作という、彼自身もいなくなってたんですけども。

私が戻ったときに一つは中村先生とのつながりがあったこともあり、まして私は駒澤大学におられた。中村先生を訪ねてやっぱり中村先生の何か会議で何かやりたいですね、グレコ会。あれと一緒にきちんとしたいですね、とか言っていたんですけども。

いろんな、そのときに駒澤におられた中村先生の状況もありまして、それを同時に生かしながら何かサロンを作ろうという風になりまして、それでいま地理学サロンが今に至っているんですね。

いかにも野間先生から発生したグレコ会の分派のように地理学サロンが存在していて、何か私の中で枝分かれしてしまったような心境が未だにあつてですね、しっくり感がない。これをどうしたものなのかと思ひ、今日のこういうお話がありましたので、私はそのへんの気持ちを述べる機会が与えられたと思って、今日はそのことも言いたくてやってきました。

地理学サロンの方で中村先生を偲ぶ会というのを中でやりまして、私は中村先生に対する紙碑を書きました。それをまず今日は中村先生を追悼するという意味があるので、この紙碑をザッとスピードを上げて読ませていただいて、まず私の中村先生への感謝を述べたいと思います。

まず、私が中村先生と初めてお会いしたのは昭和43年1963年の7月1日のことです。その日は私が東京都立大学理学部の地理学科地誌学講座の助手に採用された日でした。その日から今日まで半世紀に渡る年月を中村先生と陰に陽に喜怒哀楽を共にして過ごしてまいりました。と申しまして晩年の十数年間は先生が体調を崩されて、身近でお話することもかなわずいた。しかたないこととはいえ悔やまれ

ます。

中村先生と最も濃密な関係にあったのは、何といっても私の助手時代。すなわち昭和43年、1963年の7月から昭和53年の1978年3月までの10年間でした。この時代、東京五輪も終わって、戦前までの価値観や慣行がまだ色濃く残っていた世の中の雰囲気、大きくうねる激動の時代でもありました。

大学内であって、私が赴任した年に地理学科へ新しく誕生したばかりの講座が目黒校舎に置かれた地誌学講座であり、戸谷先生はその初代当時に中村先生は助教授に昇進されたばかりで、もう一人の助手、野澤秀樹さんはフランスに留学され2年間は帰ってこないという状態でした。

助手になって1ヶ月後に日本へ復帰したばかりの小笠原諸島へ貝塚爽平先生らと学術調査に行き、帰ってから私は秋に地誌談話会を発足させ、ここで地誌のメンバーだけで地誌の院生の方も一緒にして地誌談話会を発足させて勉強会を始めました。翌年には戸谷先生を隊長にケニアの学術調査が約束されていました。

しかし翌年の春先には大学紛争の攻撃が怪しくなり、ついに都立大学に飛び火し、目黒校舎は封殺され、研究室に入らない状態となりました。

この間に戸谷先生や中村先生と一緒に始まった苦労の数々はきりがありませんが、それらを一切省きとにかく私がアフリカへ出発する。数日前に機動隊が入り、目黒校舎の封鎖は解除され、研究室に私は実は窓から入りました。そうしたところ、私の書籍のかなりの本が一切なくなっておりまして、簡単に言いますと封鎖学生が私の本を持ち出して古本屋に売っていました。荒れ果てた校舎に絶苦しいつも研究の再開を決意しました。

隊員の中で一番若い私だけが経費の節約でフランスの客船パシフィック号に乗船し、昭和44年10月22日に横浜港を出港し、29日間の船旅を経てケニアのモンバサ港に同年11月18日に入港、初めてアフリカ大陸の土地を踏みました。

この港町で私を出迎えてくださったのが飛行機で一足先にケニア入りしていた中村先生でした。初めてのアフリカに興奮の日々でしたが、一方で辛いかのように思えた約1ヶ月の船旅の醍醐味を知った興奮のほど大きく、私は中村先生を相手に朝から晩まであらゆる機会を狙って船旅の体験談をまるで壊れたラジオカーのように話し続けました。時にはフィールドノートのスケッチを見せながら、時にはその場の様子を見振り手前で話し続けたのでした。

すると中村先生はまた私が話すことがますます楽しくなるように相槌を打たれるのです。いま思い出しても先生の温かいハートと相手の目を見ながら話をきちんと聞いて相槌を打ちながら返されるように的確な一言に話の内容が一層膨らみ、話の核心部分が鮮明になり、話し手が新たな視点に気づくということが12月3日にナイロビに入るまで続いたのでした。

中村先生はさすがに連日の私の興奮した話しぶりに驚かれ、呆れられたことが帰国後教室に届いた先生からの手紙でわかりました。要するに呆れたよ、と書いてあります。

その場で一度でもこういうふうにもういいよ、というような言葉もなく、楽しそうに聞き一緒に大笑いをしてくださった先生でした。今思い出してもあの時ほど自分の体験談を話し続け、しかも聞き手の方がきちんと話を聞いてくださった経験はありません。改めて先生に心からの感謝を申し述べ、先生のご冥福をお祈りしたいと思います。

ここで普通は終わるんですけども、中村先生を通して聞き上手とは何かを考えていますと話し手が繰り出す話題の核心部分や、輝きの部分を浮き彫りにする相槌や一言を挟みつつ、話し手にとって話せたことの満足感を幸せ感が味わえるオーラを出し続けることだと先生から学びました。

その後、このほどのことではないにしても、中村先生には色々な思いや考えをぶつけ、意見交換をしては励まされ思考を深めることができました。

中村先生の日常の人柄、研究を展開されるお姿を通して、私が先生から感じ取ったことを不尊なこともかもしれませんが、短くまとめてみると、次のようなことだと思っています。

中村先生は日常生活においても研究においても全体と部分の相互関係に注目され、それを思索し、全体と部分のその均衡をもたらす時間と空間の関係、すなわち地理学的世界を希求されていたように思います。

さらに先生は均衡をもたらす時間と空間の關係に美的なものを感じ取るとともに、加えて品性なるものを外に向かっても内なる人に向かっても大切にされ搜索し、発想し続けた静かなる求道者であったと思います。そしてお人柄も風貌も最後まで柔和な教育者であったと思います。

最後に生前に先生とお話したことを述べて締めくくりたいと思います。ある時、中村先生と岩波書店の編集部岸本登志郎さんと会合の後3人で飲食を共

にした席で、どんな話からの話しになったのかを忘れてましたが、私はネイティブアメリカンの死に方の話をすることになりました。

それで話の途中なんですが、アメリカインディアンの男性が自分の死期が近づいたことを自覚した時、家族にそのことを告げます。すると家族とその関係者はあちこちに散らばっている親類縁者や縁のある人たちにそれを知らせに行き、人々が馬に乗ったりして集まってきます。

そしてみんなが集まったところで死の演説をするのだそうです。大演説かと思いきや集まってきた一人一人に向かって、その人への感謝の弁を述べるのです。

例えば会う時は何々をしてくれてありがとう、とこうして一人一人との思い出を通して感謝の意を伝え、終わると最後に力尽きて死ぬというのです。

もしこの時に死ねなかったらどうするのかとその場合もあるらしい。その時は野外で、その人をみんなまで死ぬまで水をぶっかけるそうです。そうして死を見届けてから人々は帰って行くというのです。

この話をした時に、中村先生も岸野さんも意外な展開に一瞬声をつまませながら、一瞬声を詰まらせながら、小声でとても感動したと呟かれました。

中村先生、ネイティブアメリカンの話の死者と生者が反転していますが、私の船旅話をあんなに一緒に聞いていただき、本当にありがとうございます。

その後、先生と平成6年1994年5月に地理学サロンを作り、先生と地理学の何たるかを追求める場を作り、ここまで頑張ってもらえました。全て先生のおかげと感謝の気持ちで一杯です。どうかやすらかにお眠りください。

しかし先生、いつか私も先生のお世話へと参ります。また再会するなりしばらく私は話をしまくり、さらに地理学サロンを作りましょうと言い出し、そうです、冥界の地理学サロン、まだ誰もやっていませんよ。先生、面白いではありませんか。そうなる。あの世でも忙しくなりそうですが、どうやら先生と私はいつまでもご縁が切れそうにありませんね。合掌。

中村先生との話はここまでですが、今ちょっと申し上げたグレコ会できるまでの経緯の中で、私の中でとても忘れられないのが、この講座の誕生と大学紛争があって、その大学紛争があった時に地理学科の教員全員が八王子セミナーハウスに行き、泊まりがけで大学とは何ぞや、学問とは何ぞやという勉強会をやりました。

その時に私は話題提供者の一人になりまして、大学とは何かというのを若者として話せということになって、私は話をしました。その後、教員同士が地理学とは何ぞやとやりとりをして、私がいろんな発言をしますと、野間先生がこういうですね。「あきまへん、堀さんあきまへん」。勉強足らんということをおっしゃるんですね。

私はどの部分がどのようにあきまへんか、ということと言うとみんな今そこで言えないけれどもとにかくあきまへん。こういうふうにおっしゃってですね。どうしたもんだろうかと思って、私はますます悩んでいるわけですね。

そこで野間先生と梶川君とちょっと本気で勉強会やろうよと持ちかけましてそれで独酌会、ここに書いてある独酌会という会ができました。これは野間先生も口癖で、シンポジウムというのはお酒を混ぜて飲みながら話してシンポジウムとよくおっしゃるわけです。

ですから授業終わって我々自身の時間がなつたときにお互いに一杯飲みながら、しかし他人のコップに注がないで、自分の意思で自分のコップにお酒を注いでやるという、独酌の実は漢詩の中に独酌あいに親しみなしという、有名な李白だったと思うんですが詩がありまして、野間先生がその詩を引用してその意味の独酌なんだということをおっしゃって、独酌会を始めました。

このことがすぐ教室に伝わると、ほとんどの人は何のことはない野間先生はお酒好きだから飲みたいだけだよ、というのが周りの人たちの評価でした。

そんなことはどうであれ、私自身は本当に地理学とは何ぞやということの本気で考えないと大学紛争のときに学生たちとやりとりをしたときのやりとりがですね、深まる必要があると本気で考えていたので、そうでないと給料をもらう立場にある人間が給料をもらう資格がないというところぐらいに悩んでいましたので。

この独酌会の地理学談話というのはお互いにもものすごく大事にしてしまして、私はもう欠かさず出ました。それで独酌会で話したことを地誌学講座でお弁当を食べるときに私がそれを持ち出すわけです。それで戸谷先生にはこういうことをやりましたと軽く報告するんですが、戸谷先生はもう微動たりもしないで自然地誌でいくぞとおっしゃっているんですが、中村先生はちょっと若干動揺しているのが感じられますからね。

それで私が中村先生に向かって、先生、独酌会や

っているんですが、地理学とは何とでもやっているんですけど先生どうですか、と私がガンガン話をするんですね。

だけど中村先生は、最初はいいややそういうことはそういうことでと実は乗ってこられないんですね。それはそれだよという感じで当初は、ところが雑誌会に図書館の雑誌会にお誘いをし、試しに来てくださいよと言って、独酌会にもちょっと案内をしたりするようなことがあって、本当にある種の強引な部分があるんですけども、中村先生を引きずり出すということをやり始めました。

そうしたらですね。中村先生は自分の中にあった地理学と、その野間先生が言う地理学との間が、差がありすぎて、これが地理学ですかという戸惑いに最初もう呆然とされるという光景が何回もありました。

そのことがちょっと飛びますけども、野間先生の特集で理論地理学ノートの追悼文のところ、野間先生のことを書いた中村先生の文章、「グレコの苗が育った」という、このところの文章ですね。私がグレコ会の前身だった研究会に誘われたのは、前身というのはいま読者会のようなことなんですけども。こういうところに行った時にですね。身の恥を包み隠さずに書くところで率直なことを言っておられます。

この頃私は初めからこの会のメンバーだった野澤さんや梶川さんたちの議論の内容が理解できない。気候学は地理学の一部。だから地理学のことを分かると考えていた。自分が間違いだったと思い知らされて、そのうちに私にも話題提供の順番が回ってき

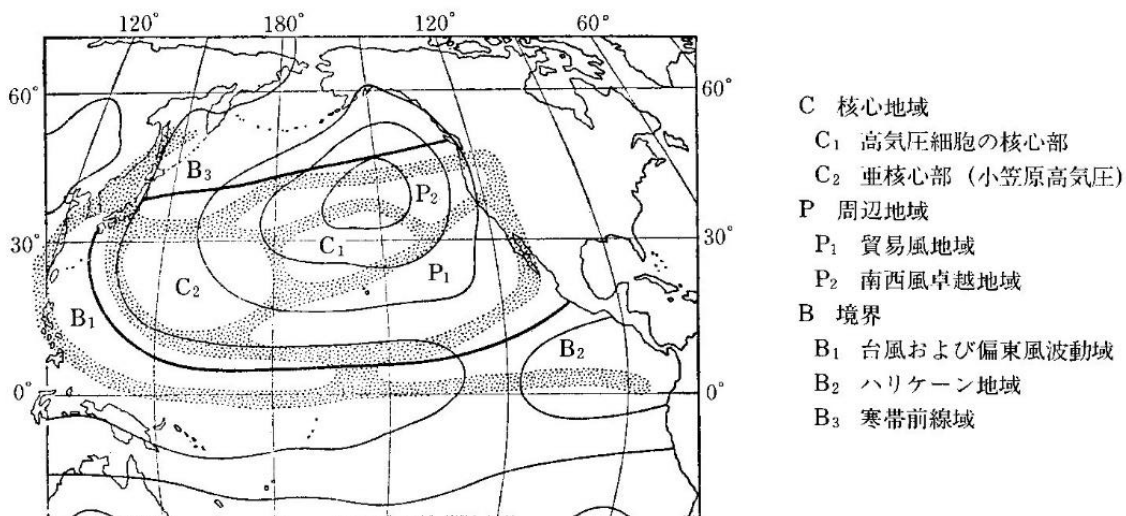
てどうしてそうなったのかをはっきりと覚えていないが、移動がテーマだと正直なところ、なぜ移動が地理学なのかさえ分かっていなかった。

商品の移動もある。人間の移動もある。気候現象だって大気やエネルギーの移動によって起こるのかわからないかと思いついて、自分の頭で移動のことを考えていくと、今まで商業地理学、交通地理学、気候学などと独立した学問のことと思っていたものが違って見えてきた。不思議な興奮を覚えたことを思い出すと、そうです、これまさにこの部分なんです。これは中村先生が変貌していくのがはっきり分かります。

これは私自身のプロセスでもあるわけですね、それでグレコ会に至る前の前段階の雑誌会。それから独酌会で話したことを中村先生と2人だけでわーっとやってかき混ぜて話していくと、このことを吐かれるわけです。

あれが地理学なんですか、とかつて最初おっしゃるんですが、だんだん中村先生が変貌されていくわけです。そのことがちょっとはここに中村先生の英語の論文で、それとその訳で別の雑誌のところに中村先生ご自身が自分で英語で書いていた論文を日本語で書いた論文、本を引用したんですが、実はこの図面ですね。これが実は勉強会の成果なんです。これは何気なく気候学の北大西洋の高気圧の図なんです。ところがそれを地域部分のように分けてみた。初めて地理学と気候学と地域分化というような言葉が結びついた。

それを一つの論文にしたのがこれなんです。中村



第1図 7月の北太平洋高気圧の「地域構造」

(中村和郎ほか編 1991. 『地理学講座4 地域と景観』古今書院, p.28)

先生がこの論文を書いた後、何回も私にこれは地理学を、初めて自分が地理学だということを理解して気候学にそのアイデアを入れたことなんだと言って感慨深く、このことを何度もおっしゃって、私にもそのことを何回もおっしゃいました。

ですから私は中村先生の論文のこの図を見ると、この図の向こう側に野間先生の顔が浮かんできますし、グレコ会に至った後も中村先生が一生懸命、地理学と自分のご専門の気候学との間をどうやって結びつけるかということに辿り着いた一つの成果として、その最初の論文です。それを活かした最初の論文という点で非常に印象深いものがあります。

その後、中村先生の変化は著しいものがありました。これはグレコ会の第1回のときのことをメモされている中村先生のことなのですが、昭和49年の1月26日第1回のグレコ会の集会ということですね。そのときに実は、システム論を我々はこだわっていましたので、チョーリーの論文をメモするというので、お互いに章を分担して紹介し合うということをやりました。

皆さんもご存知で詳しくは分かりませんが1月末に地域システムの論文を、お互いに私がイギリスを担当し、中村先生はアメリカを担当したりして、中村先生はドイツを担当されるというような。そういう形で地域システムのメモを書いたのは懐かしい思い出であります。

中村先生は本当に人間の考え方が変貌するというものを目の当たりにすることを本当に私は実感しました。先生の発言や態度が変わっていくんですね。

最終的なことは、私の考えでは古今書院の地理学講座のシリーズがありますが、そこに中村先生が編集されて、あそこで中村先生が辿り着いた心境が次々と述べられておまして、古今書院の講座はまさに中村先生にとっては自分が辿り着いた集大成を書いているな、ということがもうきっちりと分かるんですね。

そういう点において中村先生が駒澤大学に行ったら花が咲いたと言いましょうか、そういう思いがともします。

ですから私が広島大学に移動するときに中村先生はまだ悩んでおられて、都立大にいたことが苦しいとボロッとおっしゃったときがありますが、先生、何とかでも頑張ってください、手伝ってもらっていただきますからと言って、私は言ったんです。けれどもとても苦しい中村先生が、ですからどういふいきさつがあったか細かいことは私は知りませんけれど

も、駒澤大学に移られたときに、中村先生は深呼吸できる場所を見つけたらという気がいたしまして、それがいい形でうまく結びついていったように思いますね。それが思い出としてあります。

ですから野澤さんだとか、寺阪さんの後から話がありますけれども、その独酌会からグレコ会を通して、本当に野間先生を軸にして地理学とは何ぞやということ語り合った。

そしてもう一つ大事なのは雑誌会です。図書室で雑誌会をやりながら、新着の雑誌で論文を紹介しながらまたそこでわーっとぶつけ合った、そのことがものすごく刺激的であったと感じています。

こういうことで、私がアフリカに行ったときに空間の理論があって、私はあれを訳したいとか言っていたのに、堀君はアフリカに行ってダメだと空間の理論が出ちゃったので、私はメンバーに入っていないので、あれれという気持ちがあるんです。けれどもそれは置いて。

私たちが勉強会をした成果の一つは空間の理論が本の中に出ていて、一つの成果であったと思います。こういうように時間はもう時間ですよ。もうちょっといいですか。もうちょっといいですか。

私が言いたいことは、大体申し上げたので、特に先ほど私が文章、中村先生のメッセージで述べたように、中村先生とお話をしている、私は中村先生の感性というか、センスに非常にありがたいものを感じているのは、私が普通皆さんもそうだと思う、研究者というのはあることを思いつくと、ちょっと丸秘をあまり人に知らせたくない。あるいは生で言っちゃうと何か、とられるんじゃないかと思って丸秘にして、自分の中にしまいそうというのが研究者の中にはともにあります。

けれども私は実はグレコ会のあるいは読書会、あるいは雑誌会のおかげで一つ学んだことは思いついたアイデアを逆に私はサンゴ礁でしたら、戸谷先生と貝塚先生。時々町田先生にわざとくっつけるんです。そうするとありがたいことに、必ずあれはどうなっているのか、そこはどうなのかといて、非常にパツといい形で疑問だとか課題を返してください。これはアイデアを隠しているとダメだなと思ったことをすごく学んだんですね。

もう一つ地理学に対しても中村先生は、私ほとんどそれを言うと、中村先生は必ずそれを考えてうーんとうなりながらも、その瞬間にちょっと待ってくれと言って、後日また私にある話だけだと言って意見を言ってくださるんですね。

そういうことでとてもありがたい人たちに私は囲まれていたという感謝の気持ちがとてもあります。ですから、その時に感じたのはこのことですね。いつも部分と全体、全体と部分との間の往復運動をするセンスです。

これが地理学にとってものすごく大事だなと。ですからこの往復運動をするというセンス。あるいは全体とは何なんだというのに思い至るセンスと、またその時に空間と時間が同時にそこにイメージされる考え方ですね。

こんなことが当たり前のようで意外とそうではない。またこれを同時に3次元4次元で動かすことができる、思考できるというのは、やっぱりセンスがあるかなと思うんですけども。こういう点で非常に中村先生はそういうことを学ばれたような気がします。もともとセンスがおありだったんですけども、この独酌会、雑誌会でグレコ会を通して、すごく学ばれたような気がします。このことがその後、中村先生の懐の大きさというか自分を作ってきたように感じております。

ですから、従ってさっきの繰り返しでありますけども、私が中村先生は求道者、静かなる求道者という単語を使ったんですけども。中村先生はアフリカに引退した時でも何か崩れそうな瞬間とか、ちょっと疲れたらバタンとなりそうな瞬間でも、ちょっと自分の中にブレーキをかけてワーンと爆発させない。自分をいつもコントロールしていることが透けて見える時がすごくあるんですね。そういう時に修行僧、あるいは求道者という単語が私の中に浮かぶんです。中村先生を通して。そういう単語がパッと覚えたので最後までこういう感じの先生だったなと思うんですね。

だから中村先生をいい意味で、おちょくったり、わざとふざけて先生を困らせてみたいはずら心がつつい湧いてしまう時もあるんですね。それは先生が一生懸命姿勢を元に戻そうというようなハートが見える時に、先生そんなに言わないで一緒にふざけましょうよと言いたくなる時があるんですが、そういう時でもいやいやとおっしゃる瞬間がよくあって、この点が中村先生の一つの人柄だなというふうにもいつも思って最終的に教育者という言葉が当たるかなと思っております。

ですから中村先生をこんなにあれこれ吟味してる資格はないんですけども、一つの人間の生き様として学んだかな、というふうにも思っております。

おかげで中村先生に限らず私が助手時代、あるい

は都立大に戻った時もそうですが、幸いに都立大で出会った方たちですね。最初、野沢秀樹先生、それから今日お話しされた小林さんですね。小林さんも私改めてお話ししてもらってから今日会えると思っていたんですが、Zoomでしか会えないので、私からも感謝を述べておきたいのですが、今日の話方を聞いていて昔の助手の時の話し方と変わっていないなと思うところがあって、非常に問題点を指摘する時の熱っぽさが非常に刺激的で、私自身すごく小林さんの持ち出す「あれが問題ですよ」という時のどのくらい問題なのかと思いながら、すごく刺激を受けていました。変わらないエネルギーに今日も敬服しました。ありがとうございます。

こういうわけで私が今まで出会った都立大で出会った方たちが、それぞれ個性豊かで、しかしどの方もいろんな意味で求道者と言いましょうか、真摯に生きていくといいますか、そういうある種の研究者として、学生であつても一生懸命の知的好奇心とかそれに対して真摯に向き合う人たちが多くて、それがすごく都立大を支えてきたように思いますので、これからもそうなってほしいなと思うし、それが私の思い出の中の財産になっておりますので。

最後に中村先生の感謝であると同時に取材で出会った皆さんと都立大に身を動いていた感謝を言いたいと思っていました。以上です。ありがとうございました。

【若林】

ありがとうございました。中村先生の人柄が忍ばれるお話だったと思います。実際に中村先生を知っている方は先生のいろんな思い出がこみ上げてきたんじゃないかと思うんです。あと少し話をしたいと思うんですけど、いま会場の方で回覧している資料は、今ちょっと話に出てきました中村先生が駒澤に移られてから作られた地理学サロンの方たちが中心になって作られた追悼文集です。そちらの方にいろんな資料が、先生に関わる資料や追悼文が出ていますので、そちらも参考までにご覧ください。

志村先生、続けていいですか。じゃあ準備ができましたら、お願いします。

【志村】

私の方は今までお話しされた先生方と全く違う立場、グレコが育っていった初期の頃に教えていただいた学生・院生という立場です。そのような学生は多くいらっしゃるんですが、今日は私の指導教官である寺阪先生のことを中心にお話しさせていただきたいと思います。題名は「一学生が遠望・羨望したグレ

コ会：寺阪昭信先生を通して」で、グレコ会の中には入っていない学生の立場からです。

寺阪昭信先生は昨年（2022年）の8月6日、都内の病院でご逝去されました。満82歳でした。新型コロナウイルス感染症流行中で、非常に近い親族のみでのご葬儀ということでしたが、私の先輩の安藤清先生と志村に今日ご参加されているお嬢さん（寺阪桂子さん）からご連絡があり、お願いして二人は最後のご挨拶の機会を設けていただきました。

今回のグレコ会の企画を若林先生からいただいた時、私自身は寺阪先生の業績一覧を作りますという話をしました。ですから報告資料の作成だけとっていたんです。でも、話す時間まで設けていただいたので、略歴・業績一覧として作成しお送りした「資料1」（レジメ最終部分）記載の中で、まだ分からないところを先ずお話しします。後日情報があれば教えて下さい。

資料「略歴」のように、寺阪先生は徳島県で1939年にお生まれになり、京都大学を卒業、1966年には修士課程を修了、その後に博士課程に進まれ同課程中途の1968年に埼玉大学の教養学部助手になられます。さらに講師、助教授になられますが、この辺の詳しい年月は、私のところでは分かっていません。

「学会における主な役職」について、先生は特に経済地理学会を中心に活躍されましたけれども、これも経済地理学会と人文地理学会で私が分かった部分だけの記載です。

続く資料内容は、著作に関してです。気になっているのが「学校用教科書」についてで、高校の地図帳を編集されたことは記載のように分かっていますが、私自身はお話を伺う中で高校の地理教科書も書かれていると思っていました。記憶では三省堂のような気がするんですが、それが見つかりませんでした。多分80年代後半だと思えるんですけども。

それから資料後半の「科学研究費」のところです。昨晚もう一度、論文等を読んでいたら1984年に「北海道東北地方の農民の冷害パーセプション研究（一般C）」というのがあって、当初は「資料1」で1行上に記載されている80年・81年のパーセプション研究の科研かと考えたんですが、もしかするともう少し何かがあった可能性もあるかと思っています。

そして一番分からないのが、資料の最後に載せた「美しい島・忘れられた島ーコルシカ島」というものです。抜き刷りをいただいているんですが、書誌情報がないもので、B5版ですので書籍掲載論文だと思えるんですけども、何に掲載されたのか分かって

おりません。内容は、1984年9月のIGU フランス大会のコルシカ島エクスカージョン時のことです。参加してみたら日本人の知り合いもいて安心したといった記述があるので、その直後くらいの刊行かと思いますが。もし情報がありましたら教えていただきたいです。以上が、私が安藤先生の協力を得て作った寺阪先生の略歴・業績目録での不明点です。

では、お送りしたレジメの1ページ目からの話に戻ります。

中村和郎夫先生のご逝去（2022年6月）に接し、中村先生とグレコ会、そして自分との関係について振り返ることがありました。その時に関係年表を作ってみたんですけど、それをもとに寺阪先生との関係を含めて纏めてみたのがレジメ「II 一学生とグレコ会の接点」（pp.1-4）です。年表の左欄が寺阪先生を主軸にしてみたグレコ会、右欄が私達学生の出来事です。

私の調べる限り、1959年に中村先生が東大より都立大地理学科に着任された。そして1976年にいわゆる『空間の理論：地理科学のフロンティア』、有名な本ですね、これが刊行された。私は1983年大学院入院ですが、同期の院生らとこの本が手に入らなくて、みんなでコピーをして複製本を作成しました。

今回は、実物を持ってきました。この本は、寺阪先生から後年いただいたものです。表紙に寺阪先生の字で「校正用」って書いてあります。また、校正として朱の書き込みが、ところどころにあります。寺阪先生は、この本ではL.カーリー「偶然と景観」の訳出と解題「地理学の新しい説明ー確率」を担当されています。また、出版社とのやり取りなど編集にもかなり携わられたようです。

1977年、同書の出版翌年、寺阪先生は埼玉大学から都立大地理学科に着任されます。そして1979年3月には中村和郎先生編で「理論地理学ノート'78」、ノートの最初の号ですね、が刊行された。この中には中村和郎先生、小林茂先生、杉浦芳夫先生、寺阪昭信先生が寄稿されています。寺阪先生の論文名は「大学生の世界像」です。このノート創刊号に関して書誌的に私が気になるのが、最後のところにある「1970年代地理学方法論主要文献目録」です。この目録は、数ページあるんですが、さらに1ページくらいの解題的なものも書いてあるんです。ですから、どういった経緯で纏められ書かれたのか、とりわけ解題は誰が書かれたか、というところが私は気になっています。

1979年3月の「理論地理学ノート」第1号が出た

翌月、私は理学部の地理学科に入学したんです。当然ながら、グレコ会のことは知りませんし、数年間は意識してませんでした。

そういった中、学部3年生になる頃「理論地理学ノート」の第2号が出るわけです。また、学部3年になった時に、ここに参加されている水野勲さん、現在新潟県立大にいる櫛谷圭司さんが地理学科に編入学（学士入学）されてきて、同期になった。その結果、同期生として勉強しなくちゃダメだぞ、みたいな雰囲気さらされていくということが起こりました。さらに1983年に今度は寺阪先生編集で、「理論地理学ノート」3号が出るということになります。この号は環境パーセプション特集号で、中村先生、杉浦先生、安藤清先生らが寄稿されています。安藤清先生は、寺阪先生の下で住民の災害パーセプションと対策行動のことで修論を書かれ「人文地理」に論文掲載されていました。このノート3号でも1980・1981年の東北から北海道の冷害における農民のパーセプションと行動について書かれています。謝辞には、学部同期の五十嵐彰さんと私の名前を記していただきましたが、私は何を手伝っていたかよく覚えていない。五十嵐さんは、杉浦先生の青森調査に同行して、手伝っていたのは確かです。

そういう中で1983年の4月、どうにか私は、水野さん、櫛谷さんとともに院生となりました。櫛谷さんと私は寺阪先生がおいでで人文地理系、水野さんは中村先生がおいでで地誌系の院生です。

この年の4月20日に「理論地理学ノート'78,'80」（1号、2号）を僕は、中村和郎先生からいただいたようです。そのようなメモが同号に記してあります。だから自分としてはこの頃になって、グレコ会を意識したのだろうと思っています。

それから会場は間違っているかもしれないですが、この頃、上総一宮のたぶん国民宿舎だと思うんですけど、グレコ会が開催されたような気がします。千葉大で日本地理学会があった時で、学会大会の後に参加したという記憶です。

この時、野間三郎先生を生田真人先生と一緒に駅でお迎えし会場へお連れしました。野間先生には、強烈な印象を持ちました。第1にご高齢で、一緒に歩いて会場へお連れできるか否か、心配でたまらなかった。第2に、研究会・懇親会での佇まいが独特であるとともに、不勉強な私はお話しながら理解できない。本当に、もの凄く知的な印象でした。なお、このグレコ会には、若林先生も参加されていて、これが若林先生に初めてお会した時でした。

1984年の3月、中村先生は駒澤大学へご転出された。私自身はM1からM2になっていく中で、修士課程を終わったら就職かと考えていた時期で、実際1985年3月には修了し高校教員になりました。

一方、1985年の10月には理論地理学ノート4号が出ます。この号は世田谷で起きた電話線途絶事故の特集で、博士課程に入学された立岡裕士さんの同事故における住民行動についての論文、水野さんのネットワーク分析に関する文献目録、学部生の近藤さんの卒論が載ったりしています。

先ほど話したように1985年4月、どうにか修了した私は、郷里新潟県の山間地にある準僻地高校の社会科教員になりました。就職直前の3月頃には、1983年度の人文地理系ゼミで講読した英文書籍の邦訳文を検討する合宿が、伊豆高原で実施されました。費用含めどのように実施されたのか覚えていませんが、寺阪先生が当時在籍していた同期人文地理系院生を誘ったような企画で、先生と一緒に大室山に登ったりした楽しい思い出があります。最終的に、この邦訳は『空間と行動論—地理学における行動論の諸問題—』として1986年12月に刊行されました。私の訳文は本当にできが悪く、若林先生にも校閲いただき最後までご迷惑をおかけしました。

ともかく、1985年4月に高校教員になってからの1年間は、高校の授業（世界史・地理）や部活指導（陸上部・スキー部）で精一杯でした。ただ、上記の邦訳文作成、1986年2月の渡辺良雄先生のご葬儀参列（五十嵐彰さんと）は、無意識にせよ研究の志を灯し続けてくれたように振り返ります。

実は、夜中に寺阪先生からお電話をいただいたことがありました。教員生活が1年終わろうとする冬で、小さな教員住宅の寒い階段で受話器を持っていました。寺阪先生のお話は、「君は修論をどうするんだ、どこかに発表しないのか」という内容でした。

「僕は、もうとても、今の力と状況では、そんな論文にできません」って言ったら、「君は書きなさい」って先生にしては珍しいハッキリした口調で言われた。そこで、ノート掲載に向けて纏め直すことにしました。寺阪先生は1987年3月に流通経済大学に転出されたわけですが、丁度その前の電話でした。

結果、1987年8月に寺阪先生編でノートの第5号「理論地理学ノート'87」が出て、上記の経緯で寄稿した私の修論も載せていただきました。同号の前書きで寺阪先生は、本号は行動地理学特集号とでも呼べるであろうと記されています。実際、この号には、若林先生の行動地理の分析法に関する論文、僕の同

期の学部生である篠崎君や、1年下の畑君の卒論(両卒論とも行動地理学的内容)が再構成され納められています。

今、振り返ってみると、この号や『空間と行動論』刊行企画期、寺阪先生としては転出もあるし、一区切りって感じを持たれていたのかなと推察します。

なお、私の方は高校現場にいるにもかかわらず、その後もいろんな連絡を継続的にいただきました。

例えば、1993年、寺阪先生はIGU(国際地理学連合)商業地理学会の日本大会(東京)を主宰されましたが、上京して手伝って欲しいとの連絡がありました。この学術大会は商業学の方々の協力も得て、目白の学習院大学で開催されました。都内の日帰り巡検(銀座等)の手伝い程度で、逆に発表会場・懇親会参加の便宜を図っていただき刺激を得ました。

流通経済大学への異動後、寺阪先生がグレコ会に直接関わったのは2004年の理論地理学ノート14号「特集 日本の都市地理学と渡辺良雄の中心地研究」でしょうか。その他の成果物をみると、流通経済大に行ってから商業地理学、観光地理学というように先生の研究関心領域・テーマは軸足が移っていったと思います。例えば、2009年には『大学テキスト 観光地理学』を編集されています。なお、この書籍の装丁は「娘が、作ってくれたんだ」と嬉しそうに私に語られたことを思い出します。

ところで、寺阪先生の都立大での授業について、当時のシラバスを全部発掘できましたので、話したいと思います。レジメの4ページ目です。1979年度のゼミのテキストは、A.G. フランク著『世界資本主義と低開発』(柘植書房、1979)とあります(僕は学部1年ですので、履修していません)。1980年度のゼミテキストは、ご自身が編集された北村・寺阪編『流通の地域構造』(大明堂)です。僕は学部2年でしたが、あまり大学に行っていなかったので履修していません。ただ、同期の五十嵐君が履修していて、彼から授業の話聞いて、面白そうなことをやってみるんだなと感じました。

結局、本格的に教をいただくのは学部の3年になってからです。この学年になり、ようやく渡辺先生と寺阪先生の人文地理学概説を履修しました。寺阪先生の授業で非常に僕印象深いのは、エドワード・ホルの『かくれた次元』を紹介されたこと、そしてルーム・ジオグラフィっていうのがあるという話です。私は、何だそれはということで『かくれた次元』を早速購入して読み、地理学のテーマに環境、認知、パーセプションがあるのを初めて知りました。

この頃、地理学というのはあまり面白くないんじゃないかと思いはじめていたのですが、やはり面白いといった気持ちになりました。それからもう一つは、やっぱり時空収束論だった。D.ハーヴェイの話ですね。こういった人文地理の最先端を寺阪先生は話してくれて、人文研で自分は卒論書くんだという気持ちになっていきました。寺阪先生・杉浦先生の授業として年度末に行った大巡検(北海道十勝地域)の準備・現地調査・レポート作成を通して、それは一層強固になりました。

以上が3年次のことでした。4年次の先生のゼミでは、D.ハーヴェイ著(竹内・松本訳)『都市と社会的不平等』がテキストとされ、講読して発表しました。難しくてもよく分からないんだけど面白かった。知的興奮に満たされていたという記憶です。これも、当時の人文地理学の最先端を感じたからだと振り返ります。

レジメ5ページ「寺阪先生の著作におけるグレコ会に関する記述例」は、グレコ会に関する先生の記述で私が関心をもった箇所を抜き出したものです。

1986年刊『空間と行動論』の「あとがき」では、「私個人としてのかかわりは、前回の『空間の理論』で新しい地理学を紹介した延長に、この書を位置づけることができる。」(p.330)と述べられています。

理論地理学ノートに関しては、どうにか続けることができたという話が多いです。しかし、最後に関わられた14号(2004年)、渡辺良雄先生の特集号の寄稿論文末では、「自分自身、都立大学に呼ばれて新たな世界がひらけ、10年近く先生と一緒に勤務できたことに感謝したい」(p.4)と記されています。こういった箇所からは、都立大学から流通経済大学へという異動に関わるお気持ちが伺えるような気がします。

ただ、私は、グレコ会は「凄いい会だな」と思いつながら外から見ていた身です。とりわけ、発足の頃のことには分からないことが多いですし、分かったとしても文献情報からです。そして、それら情報には気になることももっと知りたいことがあります。レジメ「寺阪昭信先生とグレコ会前史」(pp.5-6)の次のようなアンダーライン箇所のところです。

寺阪昭信(2011): 1960年代からの都市地理学との係わり(阿部和俊編『日本の都市地理学50年』古今書院) p.93には、「1971年、都立大学の助手をしていた野澤君(すぐ後に九州大学に移る)に誘われて、野間三郎氏を囲む都立大学関係者(卒業生を含む)

による研究会＝飲む会（グレコ会）にできるようになった。・・・それに加わった理由の1つに1969年に出版された Harvey D.W.の *Explanation in Geography* (松本正美訳『地理学基礎論』1979)を購入して1970年に一人で秩父山中にある大学寮に一週間ほど泊まり込んで格闘したが、十分理解できなかったという負の経験があった。当時の埼玉大学の同僚（飲み仲間）に科学哲学を専門とするものがいたこともこのタイトルに魅力を感じた。その延長線上に新しい地理学の動向を紹介したりして、成果は『空間の理論』（1976）に結実した。この書は・・・思い入れのある本である。」(p.93)

今日の話からは、寺阪先生のグレコ会への参加のこのような経緯がだいたい分かりました。それから非常にご正直だなと思ったのが、グレコ会に出ようになった由として、D.ハーヴェイの *Explanation in Geography* を読もうと思ったなら、とても難解でそれを今回読むというので参加しようと思った、という書き方です。

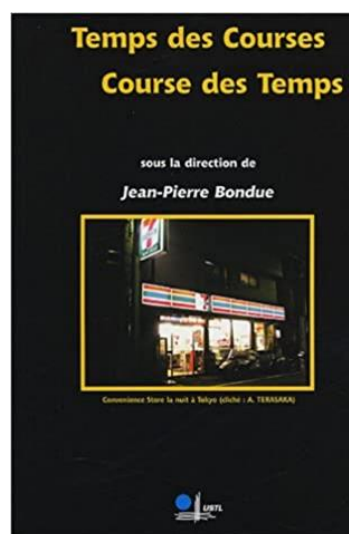
ところで、理論地理学ノート8号「野間三郎先生追悼文集」(1992)に、梶川勇作先生が寄稿された「先生と私の助手時代」では次のような記述があります。

「先生〔野間先生〕の発案で、43〔1968〕年から「雑誌会」が開かれた。・・・これと平行して、いつからか「ブラーシュ会」という研究会が先生を中心にもたれた。46〔1971〕年2月19日-21日に会のメンバーで房総を旅した。参加者は、先生〔野間先生〕・野澤・寺阪・堀・梶川である。・・・鴨川の「望洋荘」〔国民宿舎で2003年閉鎖〕と館山の「ホテル錦」に泊まる。・・・グレコ会の第1回は、49年1月26日であった。私の日記には、「3時、目黒でグレコ会、野間・中村・堀・寺阪・小生（他に野沢）、・・・」とある。・・・50〔1975〕年9月に埼玉大学の宿舎で中村・寺阪氏と合宿して、先生の訳文を直し、清書してお渡しした。・・・一冊にしたのが、野間三郎監訳『空間の理論』・・・この第二集も計画されたが、未完になった。」(pp.133-134, []は志村注記)

1971年2月19日から22日、会のメンバーで房総を旅したという。グレコ会の1回目は1974(昭和49)年1月26日だとされていますが、それ以前にも雑誌会だとかという名前で研究会があったというのは今日の堀先生の話でよく分かりました。ですから「寺阪先生とグレコ会の前身」の実際は、今日のお話で

かなりみえてきた気がします。

寺阪先生は、グレコ会の中では行動地理学という領域での研究を特になさったように思います。その後の研究編歴では、先ほどのように商業地理学、そして観光地理学にもなっていく。なお、スポーツにも早くから関心をもたれていた。僕の同期の五十嵐君は、寺阪先生の指導の下、東京ローンテニスクラブ会員のことで1984年度に卒論を書いています。非常に貴重なデータを入手して活用したものでした。成果をペーパーにしておけば、スポーツ地理学の先駆的論文になったのではないかと思うのですが、彼は就職してそうはなりませんでした。



第2図 プロシーディング書籍(2004)表紙
写真は寺阪先生撮影の夜のコンビニエンスストア

寺阪先生の研究成果は、折々に送って下さる抜き刷りのみならず、学会大会をはじめお目にかかった時のお話から分かりました。中でも、とりわけ印象に残っているのが、2004年にフランスの商業地理学の学術大会プロシーディング書籍 J.-P. Bondue ed. *Temps des Courses, Course des Temps*, Lille, Université de Lille 1 の表紙(図2)に、先生が撮影した日本のセブンイレブン店舗の写真が使われたというお話です。大会テーマはフランス語を邦訳すれば「時間の競争、競争の時間」かと思いますが、写真キャプションには「撮影者は寺阪昭信、夜の東京のコンビニエンスストア」とあります。日本では当時、コンビニエンスストアに POS システムが導入されて時刻を添えての販売データが入手出来る時代となっていました。

そこで先生は、時間軸で販売推移を分析し発表されたそうです。すると、会場全体が一瞬シーンとして、何とも言えない雰囲気満ちたと感慨深くおっしゃっていました。この文献は、発表直後に白黒コピーで頂戴していましたが、今回の発表にあたりカラーの現物を入手できましたので紹介させていただきました。

寺阪昭信先生とは、研究以外でも私的にいろいろお付き合いさせていただきました。2002年5月、私は高校から大学へ異動しました。そこで、渡辺良雄先生にご報告すべく2003年夏、上京し墓参するとの電話を先生にしました。すると、寺阪先生は一緒に行こうと提案して下さい、その時に撮影したのが写真3です。



写真3 渡辺良雄先生墓参
2003年7月20日 西多摩霊園

また、2012年には、安藤清先輩と私で、寺阪先生ご夫妻を、町屋を活用した街おこしで有名になった新潟県村上市へお招きしました。昼過ぎに村上駅に着かれた先生へ、町巡りのほか訪問希望の場所がありますかとお聞きしたら、三面ダムに行きたいとお返事。「先生あそこは凄い山の中で、悪路ですよ。1時間くらいはかかるんですよ。本当に行きますか？」と答えたのですが、「でも行きたい」とおっしゃって、結局訪問した時の「三面ここにありき碑」前での写真3です。

写真の真ん中が寺阪先生、左が安藤さん、右側が僕です。この時は、着いたら直ぐ、写真を撮りにダムサイトの向こう側まで一人でスタスタ歩いて行かれました。後からお聞きしたら、自分は学部時代に資源問題に関心があり、ダムのことをやろうと思った時期があったんだとおっしゃいました。ですから、「やっとこれなんだ」というようで、本当に喜んで

おられました。お連れして良かったと、改めて思います。



写真4 「三面ここにありき」碑にて
2012年9月21日 左から安藤・寺阪先生・志村

ちょうど35分近くになってしまいました。以上です。情報だけなんですけど、ありがとうございました。

【若林】

この堀先生の話と今日の志村先生の話を経験すると、グレコ会の始まりの頃の経緯がよく理解できたかと思いました。

結局、寺阪先生が71年に参加されたのは、先ほどおっしゃった独酌会みたいなきに始まって、グレコ会になったのは確か74年、ということですね。ということは、来年在50周年ということですね。それまでは何とか続けたいと思って。

それで今の二人の話について何か質問とか何かそういうの思い出したとかありましたら。この中には一応その頃をご存知の方も多少いらっしゃると思います。どなたでも結構ですので、なかなか、こういう今日せっかく山野先生が来られているので、最初の方で中村先生が編集された理論地理学ノート最後の先ほどちょっと紹介された地理学方法論主要文献目録というのがあるんですけども、これどなたが編集されたか分かりますか。

この1号に出ている。中村先生が編集された。誰も記名がないんですよね。それで見ていると最後のところで山野先生が78年に人文地理に書かれた展望論文が紹介されていて、そのポスト計量革命にもちゃんと目配りされていたんだな、というのが分かるんですけど。これどうでしょう、何か、堀先生はご存知ですか。多分この頃のなので。

【堀】

作った人は僕じゃないですね。中村先生が残されていたやつですね。

【若林】

あと小林先生が同じ号に寄稿されているので、ひょっとしたら、何かご存知かなと思ったんですけど。小林先生、まだ何か参加されていますよね。何かご存知のことありますか。

あと今せっかく、山野先生が来られているので、山野先生とグレコ会の関わりみたいなことで何かお話いただけたら。

【山野】

私はどうも野間先生とのつながりで、グレコに関わるようになったと思っています。そうしてお酒が少々飲めるものですから、先生がそういう時、何とか喜んで招いていただいたりしたと思っています。非常に個人的な思い出で、これは野間先生が亡くなられた時の追悼文集にも書いたのですが、東京都立大学の目黒校舎、深沢にあった野間先生の研究室に行きましたら、先生が、三島由紀夫が自決した新聞の号外を見せて、今朝こんなことがあった、ということを知らされたことが非常に印象に残っています。

それで今もお話を伺っていて思ったんですけど、野間三郎先生というのは、もともとは地理学史の特に生態学的な研究方法のドイツにおける展開について研究しておられたわけですが、都立大学に来られてすぐに着手なされたのは、志村先生のお話にもあったんですけど、地域分化についてとか、中心と周辺についての考え方とかというようなテーマです。地域分化というのは、それはハーツホンのいわゆる areal differentiation とは違って、ラッツェルの Bewegung (移動) と分化ですね。さっきの中村先生が使っておられたのはそういう考え方に基づくものです。

それからもう一つ都立大から私がいろいろ刺激になったことは、杉浦芳夫さんがその頃、クリスタラーの研究から、これは今もなさっておられるわけですが、新しい地理学のいろいろな先ほどの話にもできてきた。実際の計量的な手法について研究をなさったわけで、それとの関わりがこのグレコ会にもあるわけです。

その流れの大元は渡邊良雄先生ではないかと思うんですが、野間先生はその辺で都立の方々からの刺激がいろいろあって、中心地理論にラッツェルの中心-周辺理論とかを重ねてみよう。と思われた。たぶんですね。その後、元々ご当分はあまり書かなか

ったけど、いま申し上げたような関連分野の学説史的な研究知識を周辺の方にいろいろ教えられようとされた、私は今のお話を聞いてそのことが印象的です。

【堀】

今の一言で、ちょっとタイミングをとりたいたんですけど。杉浦さんが登場するのは後で、野間さんがシステム、システムって言った時はハゲットですね。はいハゲットのあれを。あれを梶川勇作氏が『立地分析』を完訳してるんですね。野間さんがあの訳をめぐってずっと勉強会もかかわってたんですよ。

その訳そのものは、我々はその二人の世界なので。ただし訳しながら、これはどう考えたらいいんだ、システムはどうだっというのを雑誌会なんかで持ち出してくるんですよ。だから梶川君が横でハゲットを訳してるわけですよ。そのことが結構。大きく効いて、その流れの中で杉浦さんがつながってくるんですね。だから杉浦さんがここに都立大にやってくる前、もちろん研究会があつてのことなんだけど、杉浦さんに声がかかる。

背景には梶川氏のあのハゲットの立地分析などの影響というのはものすごく大きいと思うんですね。それが野間先生の中で自分のエコロジカルなアプローチとの兼ね合いの中で、ハゲットのああいう新しい動きがどういう風に結びつくんだろうかという模索が先生自身の中にあつたと思うんです。それをすごく感じましたよね。

【山野】

いや私は、いま杉浦さんよりその前の梶川さんの存在というわけですけど、それはもちろんのことですが、杉浦さんのことを言ったのはいつのことか思い出せないんですが、人文地理学会の地理学史部会例会かグレコ会の前身の会だったのかどうか分からないんですが、その折にも私は野間先生とちょっといろいろ後でお酒のやり取りした時に、杉浦さんの中心地研究について非常に刺激的だったということをおっしゃられた。それで申し上げたんです。

ですから、その前に梶川さんのあの本の原本は65年に出てるわけですが、訳本からだったんですけど、私もその頃に刺激を受けたことを思い出します。その differentiation ですが、そのもとのアイディアはラッツェルにあるというふうに先生は盛んにおっしゃられた。

【堀】

それは最初からラッツェルのことを野間さんはずっと言い続けていました。だからエコロジカルなア

プローチと地域分化との兼ね合いをととてもこだわらせたので、あの本の意味とは違うんだということを野間さん自身は言っていました。

そのことをまたはっきりさせるために、さっきの引用された千葉でお酒のことというのは土井重彦が彼がシステムをやったわけですね。彼が院生で重量級の院生でいたわけですね。その彼がまたシステム、システムとずっと言い続けていて、梶川君のハゲツトの話とか重なっていくわけですね。

これを具体的に海外じゃなくて日本でどうやったら、もっと実感の湧くシステムを展開できるかというので、お酒の研究だというので、それで千葉に行ったんです。

唐突でわからないと思うんですけど、お酒作りっていうのはお酒を作る場所っていうのは古代から作り酒屋ができる前は神社だった。神社でお酒を作っているところをまず見に行こうと。その後江戸時代に入るときに神社のお酒を作る権利を売り出す。そのことによって酒屋が登場してくるわけですね。その酒屋の登場が地域社会の単位とつながっているんだということを野間さんが言うわけです。

それで、実際に酒屋のところに行ってどういう範囲のところから酒を買いに来るかとかそういう問題で、流域みたいな小さい範囲で地域がまとまってくんだという。象徴的なものが酒屋なんだみたいな話になっていったんですけど、酔っ払ってしまって限られた人数でしたから。話はそこまであるんだけど、実感としては飲んだ印象が強いんです。けどただそのときにすごく私も刺激を受けて飲む話は調査の後の飲み会の方に話を行くんですけども、調査しているときには酒屋にインタビューするんですけど、みんなそういう地域単位みたいなものを図面を描いてくると、地域のこういう細胞組織みたいなものを、地域でできているみたいなことを。

野間さんと口で言うとそれを図にしたりなんかしたり、いまこの酒屋はそういう位置づけにあるんだみたいなことをずっとやってたんですね。なので非常にエコロジカルなシステムとラッツェルの言っているような。飲み会はそれの繋がりの中であるんだということで、地域分化というものはそういうこととして、とても強く似ている野間さんの主張がありますね。

【志村】

今の千葉の旅は、昭和46年2月19日-21日・・・メンバーで房総を旅した。・・・先生〔野間先生〕・野澤・寺阪・堀・梶川で・・・飲みながら、朝も飲めなきやい

けない、朝酒だと言っている、でしょうか。

【堀】

朝も飲まないといけないと言っている。

【若林】

当時の雰囲気がお二人両方とも直接ご存知の中では水野さん、とか思ったんですけど。

【水野】

授業を受けたときの印象を思い出していたんですけど、僕は工学部卒業して都立大3年に入った。最初の時に人文地理学概説という授業を中村先生が教えてた。その授業の各回のタイトルが抽象的なんですよ。例えば分布とか景観とか地域とか環境とか。その中に移動とかって入る。一回一回の話はそれで面白いと思ったんですけど、工学部から来たばかりした半年経って思ったんですけど、あれ、これ何の授業かと思ったんです。

その時に中村先生の中にもものすごく抽象的なレベルで統合しようとしているものをすごく繊細なものを感じたんです。けれど学部に入ったら地理を勉強し始めたばかりだったので、全然意味がわからなくて。

その後もいろんな場面で話す時にやっぱりふわっとされている。質問した内容に対する回答がふわっとしていると。なんとなくわかるんだけど学部生だとよくわからないみたいな感じでずっと続いた感じがします。

それに対しては分析的な答えを帰ってこない。最初はそれがもどかしかったんですけど。だからいつもやっぱり今から考えると地理学っていうのをすごく考えておられたなという感じがしました。

グレコに参加するようになってから、中村先生がいろんなことを言われるのを頭の中でいくつか覚えていたんですけど。僕は論文にも書いたんですけどブルーシュがこんなこと言ったよ。地域っていうのはどんなに小さく区切っていっても区分していてもそこに異物があるんだよ、違うものがあるんだよ、みたいなことを中村先生が言われて、その時ちょっと頭の中に残って気になったので、ヴィダル・ド・ラ・ブルーシュの『人文地理学原理』を見たらそんなものを書いていない。ややこしく書いてあるんですよ。

そういうややこしい文章を中村先生がすごいスパッとと言われるということがそれだったんだな。スパッとと言われるからヴィダル・ド・ラ・ブルーシュが言ったのと違うんだけど、頭の中にすごく入ったというか。

地図に似たようなことがいっぱいあって、地図の中で白紙のところがある地図って見たことありませんかと言われて、あれ変ですよと言われて。地図っていうのは全部を書き込まなければダメだという話を中村先生に言われたんですよ。

そしたら、今日参加されている小林先生が言われて、「かなわんわ」みたいな感じのことをおっしゃってたんですね、両方セットで頭の中にあるんです。けど全体を描かなければいけないといつも言われていて、そういう抽象的な話の中に中村先生のパワーをいつも感じてきたなという。中村先生だけですけれど。感想を追加しました。

【若林】

ありがとうございます。私も中村先生も書かれたもので最初に接したのはこの理論地理学ノートの最初に出てくる地域の認識っていうこれを何回も読み返して感じるような話がいっぱい出てくるなと思って、読むたびにいろんなアイディアが出てくるようなそういう意味であったような気がします。

他の方、なにか今回の時間超過するかなと思って最初からちょっと思ってたんですが、一応この後予定としては理論地理学ノートに特集号を組みまして今日発表していただいた方も含めてそれ以外の方にも声がけをして書きたいという方にはぜひ、寄稿していただいでですね、思い出話でもいいですし、お二人に関わる内容で考えたこととか。お二人についての関連した話題とかありましたら、書いていただくような企画を考えております。

今日は時間が限られていますけどもそういう形で、また連絡させていただきますのでぜひ、寄稿してください。理論地理学ノートはほぼ毎年出してまして、ただあまり人目に触れないので今日ちょっと配りしたのが最新号です。出たばかりなのですが、これは過去のものも全部オンラインで大学の機関リポジリの方に出ています。そちらでちょっと探すのは大変ですけども。過去の記事については全てオンラインで読めますので興味のある方はご覧ください。

それから何か、今日は寺阪先生のお嬢さんも来られているということで、もう少しお聞きしたかったこともあったんですけども。私個人としては、中村先生が転出された後で私が着任したので。ただ地図学会の関係で先生が会長だった頃に常任委員会でいろいろと仕事をしていたので接する機会がありました。寺阪先生は、考えてみると私が都立大で一緒だったのは1年しかなかったですね。助手できて1年目だけお付き合いしていたんですけども。

その後はいろいろ科研で付き合いがありまして、いろいろと接する機会がありました。話が長くなるので詳しくは理論地理学ノートに書きたいと思っております。

ということで時間超過しましたが、オンラインの方で何か発言とかございますか。

【寺阪桂子】

私たちの話の少しずつ馴染みのある後もあったので、新しい視点でいろんなことを思い描いて楽しませていただきました。今日は志村さん、そして若林先生のご厚意で参加させていただきまして本当にありがとうございます。

【若林】

どうもありがとうございました。「理論地理学ノート」は、またお送りさせていただきますので1年くらい先になるかもしれませんが。またよろしくお願いします。時間が来ましたので、これでグレコ会は終わりにしたいと思います。また50周年の会を開きたいと思います。今日はありがとうございました。